

山頭火

その精神の風景

松尾勝郎 著

おうふう

山頭

その精神の風景

江苏工业学院图书馆
藏章

松尾勝郎 著

松尾勝郎（まつお・かつろう）

1931年 神奈川県生まれ

1957年 早稲田大学大学院修士課程修了

専攻 近世文学 俳諧文学

成城大学短期大学部名誉教授

著書 『近世俳文評釈』『建部綾足研究序説』『芭蕉点描』『内藤丈草』など。

現住所 〒241-0816 横浜市旭区笹野台4-43-3

山頭火 ——その精神の風景——

平成12年1月10日 初版印刷

平成12年1月20日 初版発行

著者 松尾勝郎

発行者 坂倉良一

印刷 電算印刷(株)

発行所 株式会社 おうふう

東京都千代田区猿樂町1-3-1

(郵便番号) 101-0064 (振替) 00140-2-665242

(電話番号) 03-3295-8771 (営業)

03-3295-8774 (編集)

検印は省略いたしました。

©K. M. 2000 Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが落し字の際はおとりかえいたします。

定価はカバーに表示しております。

ISBN 4-273-03107-8 C 1095

山頭火——その精神の風景——目次

山頭火と古俳人 5

山頭火と芭蕉 26

山頭火と井月 56

山頭火の俳論 73

山頭火と世間師 105

山頭火の読書遍歴 125

山頭火と昭和の潮流 166

時代の音と時代の波 199

あとがき 259

初出一覧 261

山頭火——その精神の風景——

山頭火と古俳人

伝統形式を脱却して自由律俳句を自己の文学の手法とした山頭火は、「道として、行として」あるいは「私にあつては、生きるとは句作することである、句作即生活だ。」を信条に、放浪行乞の日々にあつての観照と孤独な庵住で得た諦観とを、たゆむことなく句作に凝結させていった。だが、その形象化された作品の背後には、ともすれば破滅の魔界に、あるいは死の深淵におのれを誘いこもうとする、凡俗なもうひとりのおのれの影が見え隠れしていた。そうした自家撞着をいかに克服して自己救済を成し遂げるかが生涯にわたる課題であり、おのれの内なる山頭火との対決こそ彼の生そのものであった。時としてはみずからの手に余る振幅の激しい衝動的な感情を沈潜させ、あるべき方向性を発見する手がかりの一端を、同じような軌跡を残した古俳人に求めようとした。

本章は山頭火がどのような古俳人に関心を寄せ、そこにどのようなアプローチを架けて自己を照射させたかについて考察してみたい。

句作をはじめた当初の山頭火は伝統形式たる定型を踏襲していた。明治四十四年（一九一）郷土の文芸誌「青年」に参加し、弥生吟社の句会に出席したころは田螺公と号して、「吾妹子の肌なまめかしなつの蝶」「泣き得ぬが悲し」「葉の散る見ても」「啊弁の寒山詩話や梨むいで」など三十歳の多感な情念を詠むところから出発した。しかし、一方において「月に浮ぶや浴衣模様の濃き薄き」「君を送る急行列車柿渋き云ふ」「島の悲劇もふと見たり芒に印象す」のように感情の高揚によって破格の句となるケースもあつたが、定型の範囲を大きく逸脱することはなかった。つまり、句作に心を向けたころの山頭火にとつての俳句は古俳諧の延長線につながる文芸として映じていたわけである。

やがて井泉水の率いる「層雲」に加わり自由律を表現方法とするようになってからも、古俳諧に対する関心を捨てようとはしなかった。そればかりか、俳句革新運動の口火を切った子規が、俳句を近代文学として位置付けようとする立場から「発句は文学なり。連俳は文学に非ず」と否定した連句を、積極的に習得しようと意欲を示した。

近く同人間で連句の習作をやります。おやりになりたい方は申越し下さい。今更いふまでもなく、連句が解らなければ古人の俳諧は其半分は解らない。そして連句は自分で作らないと解らない。私たちが連句を習作しようとするのは、連句を作ることよりも連句を味ふことに、最初の意義を認め

たからで、ここから古人の俳諧を再鑑賞したいと思ひます。

古俳諧を理解するために連句を学ぶ必要性を説くこの呼びかけには、古俳諧への傾倒と愛着が感じられる。これは昭和五年、熊本市春竹琴平町の仮寓「三八九居」において組織した三八九会のメンバーにむけた呼びかけで、連句を読みかつ習作することを通してドグマチックに陥るのを防ぎ、他人と調和する心境を得ようとした試みでもあったろう。この謄写版刷パンフレット『三八九』第二集には「本集から、別冊付録として去来抄の抄を添えました。……」との記事もあり、古俳諧にむけられた関心をうかがわせてくれる。

昨日も今日も連句の本を読む、連句を味ふために、俳句を全的に味ふために。(昭和7・6・15)

これも連句を読んでの感想だが、山頭火の書き残した日記・随想類に登場している具体的な古俳人を拾ってみると、芭蕉をはじめ蕉門では其角・嵐雪・路通・惟然など、蕪村・几董・召波・大魯・蝶夢といった中興期の諸俳人、それに乙二、一茶、井月などがある。

これら古俳人の採りあげ方をみると、一つは、

几董、召波、大魯の句を鑑賞する。(昭和12・7・1)

蝶夢和尚文集を読みつづける。(昭和13・8・30)

どのようなコメント抜きの記事である。このそれぞれの俳人たちの作品からどのように触発されたかは想像するしかないが、几董は繊細な感覚の句風、召波は閑雅清澄、大魯は直截簡潔と差異はあるもの

の、いずれも蕪村門の俳人として各自味わいのある佳句を残している。また『蝶夢和尚文集』は素朴平明な文体ながら輕妙さを湛えた俳文集で、蝶夢の誠実さをよく反映させているので興味を惹いたであろうことは容易に肯首できる。

蕪村に関しては、

三備山間をヒヨロゲまはりました。

旅に病んでトタンに雨をきく夜哉（戯作一句）

これから西しようか、東しようかと迷っています（迷はなくていいのに）、若し西するようならばお目にかゝれます、こゝでまた一句

尾花ゆれて月は東に日は西に

芭蕉翁、蕪村翁、併せて兄に厚くお詫び申上ます。

（木村緑平宛書簡 昭和3・10・6付）

芭蕉の「旅に病で」の句とともに蕪村の「菜の花や」の句を戯化したこの書簡と、他には、

芭蕉……感傷

富士川の渡。

市振の宿。

蕪村……貧乏

悪妻。

一茶……執着

大福帳。

(昭和11・9・29)

と、三者のイメージを並列させたその一環として触れているのにすぎない。ここで山頭火のいう芭蕉の感傷、一茶の執着は容易に納得のいくところであるが、蕪村に貧乏と悪妻の烙印を押したのはいかなる見解によってであろうか。蕪村は画技によって生計を立て、俳諧は余技の楽しみとしたから絵を売却して生活の糧としていた。そして、京の富商寺村百池、但馬の霞夫・乙総などのパトロンも控えていたので、日々の暮しに事欠くような状態ではなかった。だが、文人趣味的傾向をもった蕪村は日常生活の場において華奢風流を好み、そのためしばしば収支不均衡の状態を生じたであろうことは想像できるし、実際に手元不如意を門人に訴えた書簡も伝わるから、貧乏であったとするのも一つの視点ではあろう。悪妻が蕪村の妻女ともを指すものであれば、頼原退蔵氏が「蕪村の妻が黠性で、夫の没後遺画を求めにわざ／＼日光あたりまで出かけた事が、『逸人画史』や『名家書画記』に見えて居る。蕪村の没後その遺墨が急に高価になったことは、秋成も〈蕪村が絵はあたひ今では高間の山桜花(胆大小心録)〉と言って居るのだから、欲に迷った女心からさうした事実がなかったとも言へないが、さりとて伝説のまゝにも信じ難い。」と語っているような話柄を、どこかで伝聞していたかとも思われる。

つぎになんらかのコメントを加えている俳人に触れてみよう。

去来集を読む。

(昭和12・4・24)

落ちついて読書、其角、嵐雪鑑賞。

(同・7・2)

其角の作はうまいとは思ふけれど、芭蕉の句のやうに身にせまり心をつものがない、私は其角を好かない、去来を好く。

(同・7・3)

嵐雪の句はうまくて好きである。

(同・7・5)

其中庵に腰を据えていたこのころ、熱心に古俳諧を読んでいたようで、蕉門の双壁と称された其角と嵐雪、および芭蕉の敬愛の厚かった去来に対する評は、山頭火の志向性をこれら俳人への好悪に反映させているかのようなのである。其角を嫌悪する理由は、芭蕉に「伊達風流にして、作意のはたらし、面白物」(『俳諧問答』)と評されたその作風にもよるだろうが、寛濶な都会人としての洒脱な生活意識そのものに田舎者山頭火は反撥心をもったのであろう。其角とは対照的に高潔誠実な人格で、格調高い作風を示した去来に寄せる好感は、其角にむけた嫌悪感とうらはらな感情表現とみてよい。嵐雪については、温雅平明ながら滋味のある句風に共鳴したのもあろう。

惟然については、

紅足馬さんから貰ってきた名家俳句集を読む、惟然坊句集も面白くないことはないけれど、隠者型にはまってゐるのが鼻につく、やっぱり良寛和尚の方がより親しめる。

(昭和5・10・28)

と述べる。山頭火の読んだ句集は俳諧叢書第三篇『名家俳句集』にある「惟然坊句集」であろうが、同書には発句の他に惟然の書簡二通、貧讀一篇、それに十篇の逸話も収まっているので、これらを通読し

て惟然の句風と人物を自分流に判断して、こうした発言となつたのであろう。おそらく「或日庭前の梅花、時ならずして鳥の羽風に落散を感動せしより、しきりに隠遁のこゝろざしおこりてやまず。ある夜妻子を捨て、みずから薙髪して芭蕉門にかけ入、吟徒となりて昼夜をわかず。俳諧三昧にして、終に此道の大眼悟徹を遂たり。」（秋荃序）といった惟然の言動を「隠者型にはまつてゐる」と判断し、そこにかにも俗耳に入りやすい隠者のポーズが示されているのに拒否反応をみせ、良寛の自在な離俗の姿を対蹠的に連想したのであろう。しかし、妻子を捨てて隠遁した過程、あるいは「うめの花赤いはくあかいはな」「けふといふけふこの花のあたゝかさ」「ひだるさに馴てよく寝る霜夜哉」「冬ごもり人にもないふことなかれ」といった句風など、惟然は山頭火の俳境に類似した要素を多分にもっている。

路通については、つぎのように記す。

(a) いね／＼と人はいはれつ年の暮（路通）のみじめさを毎日味はなければならぬのである。

(b) いね／＼と人はいはれつ年の暮——路通の乞食吟である、私は幸にして此季節には行乞に出かけなくてすみさうだ、ありがたい。

(c) 俳諧勸進帳 奉加乞食路通

いね／＼と人はいはれつ年の暮

草臥て鳥行くなり雪ぐもり

草枕蛇を押へて寢覚めけり

これらの記述は、いずれもその時々之感懷を『猿蓑』所収の路通句に仮託したもので、(a)は昭和五年十月、行乞の旅にあつた宮崎県高鍋町の本賃宿川崎屋において記した文で、世間師の悲惨な境遇を路通の句に象徴させている。この句は、せわしい年の暮れになると自分のような乞食俳人は迷惑がられどこでも相手にはしてくれないと、途方にくれる孤独な心情を詠んだ句だが、世間師というものは路通が年の暮れに受けたような仕打ちをいつも受けなければならぬと、句意を普遍化している。ここにいう世間師とは旅から旅を渡り歩いて生活をたてる人々の称呼で、山頭火も行乞の途次において多くの世間師と出会っているが、その世間師の側からいえば托鉢たくはつによつて飢えをしのぐ門付け坊主山頭火は立派な世間師である。とすれば、この一条は世間師としての覚悟をみずからに説いている言葉とも受けとれる。

(b)は昭和七年十二月、其中庵独居の感慨で、冬日影のなかに路通の句を媒体としてかつての行乞の難儀を今は回想の対象にしている満足感。(c)に挙げる三句は昭和十二年七月三十一日の日記に記されていて、路通が「あまねく俳諧の勸進をひろめ風雅をおこすべし」との観音の靈夢を機縁に千日の勸化を發願して廻国し、各地からの応募句を主に編集した『勸進牒』(元禄四年刊)に収める発句である。「草臥くさばて」も「草枕」も共に「いね／＼と」と同じく旅中吟であつて、自己の行乞放浪での体験と重なり合う共通認識を、これらの句に感じとつたのであろう。

蕉門にあつて路通ときわだつて対照的な、庵住の境涯に觀照の世界を作りおせた丈草への関心もなみなみではなかつた。

丈 草

性くるしみ学ぶ事を好まず、感ありて吟じ、
人ありて談じ、常はこの事打わすれたる如し。

春雨やぬけ出た儘の夜着の穴
(去来、丈草詠)

大原や蝶の出で舞ふ朧月

鶯や茶の木畠の朝月夜

白雨に走り下りるや竹の蟻

時鳥啼くや湖水のささ濁り

行秋や梢にかかる鉋屑

・蜻蛉の来ては蠅とる笠の中(旅中)

・虫の音の中に咳き出す寢覚かな

幾人か時雨かけぬく瀬田の橋

ほこくと朝日さしこむ火燧かな

水底の岩に落つく木の葉かな

・物かけて寝よとや裾のきりくす

連のある処へ掃くぞ蟋蟀

・ 淋しさの底ぬけて降る霽哉

交は紙衣のきれを譲りけり（貧交）

はせを翁の病床に侍りて

うづくまる葉の下の寒さかな

・ 朝霜や茶湯の後のくすり鍋（無名庵）

（昭和12・7・31）

山頭火は文章について直接にはなにも語らず、去來の「文章誄」（『風俗文選』）の抄と、好みの句を選んで羅列するのみであるが、これらの選句は文章の無欲恬淡な人柄と庵住における靜謐な句境に惹かれたよりどころを無言のうちに伝えてくれる。山頭火の愛讀書でもあった『碧巖錄』第九則の垂示「有仏の処には住まることを得ざれ、住著まらば頭角生ぜん、無仏の処にては走り過ぎよ、走り過ぎざらば草の深きこと一丈ならん」により号を得た俳僧文章の俳境は、同門正秀の問に「文章云我問処は言語の俳諧にあらず禪の俳諧なり、正秀問禪の俳諧とは如何、文章云山は只青山、雲は只白雲、はせをは実に達磨なるはと云へり」（『俳諧一葉集』）と答えた禪的境地にあり、それは禪俳僧でありながら教条的拘束にとらわれずに行動した山頭火の境地と共通するところであった。文章の俳境は、このころの山頭火の「すべて隱通的に。——孤独と沈黙との生活にかへれ。」との心境に適っていたであらうし、「文章誄」にいう「感ありて吟じ」は、「高くして強き感情、何物をも——自己をも燃焼せしめずにはおかれないほどの感情、その感情から芸術——詩は生れる、自己、燃焼が、やがて、自己表現である。」との信念と発想